宗教感話

賛美歌を創作するということ
――現れる神の徴

大学教育人間科学部教授
山本 美紀
YAMAMOTO Miki

２０２２年から「賛美歌を創ろう！」という会を、宗教センター主催「キリスト教文化に親しむ会」の下で開いています。クリスチャン、ノンクリスチャンにかかわらず、お昼休みに集まって、テーマを決め、自分たちの創った歌詞や曲を持ち寄り、あれこれ創作に関わる話をしたり実際に歌ったりしています。そのようにして集まった賛美歌で、２０２４年・２０２５年には日本賛美歌学会の大会で発表の機会をいただき、今年の３月には当学会の紀要13号で「青山学院大学『賛美歌を創ろう！』創作賛美歌集」として掲載されました。

「賛美歌を創ろう！」では私は指導する立場ではなく、賛美歌を創作する場を提供し、一緒に賛美歌を創りつつ学ぶメンバーの一人です。賛美歌を通して、メンバーの一人ひとりに神さまがどのように触れ、現れているのか、その一面に出会う度に、私もまた神さまの新しい側面に気付かされたり、驚かされたり、嬉しい気持ちになったり、時には悲しい気持ちになったりするのです。

クリスチャンの学生の創る歌とノンクリスチャンの学生が創る歌は、当然違います。前者は、いわばしっかりとキリスト教信仰の下で訓練（教育）され、使う言葉も聖書的・信仰的で、象徴的に言葉を使います。それは必ずしも意図してやっているわけではなく、クリスチャンの文化の中でしっくりとくる言葉の選択・判断が無意識に働いていることがうかがえます。一方ノンクリスチャンの学生は、日常に起こる様々な出来事を、普通の言葉で詞に落とし込んで創る傾向があります。「神さま」や「主（しゅ）」といった言葉は必ずしも出てきませんが、歌詞を通して「神とはこういうお方ではないか？」という彼・彼女に現れた神さまを表しているように思えます。

この活動を通して、いろいろなことを学びました。例えば、現代社会において見直されている、賛美歌に使用する言葉についてです。「白」と「黒」が対比的に使われていた賛美歌では、人種差別の問題への波及から賛美歌では使用が難しい（いろいろな議論があります）という指摘を受けました。その歌詞はダビデの「ヒソプで私の罪を取り払ってください／私は清くなるでしょう。／私を洗ってください／私は雪よりも白くなるでしょう。」（詩編51編９節）によるもので、決してネガティブな意味で使用したものではありません。しかしながら、「会衆歌」としてある「賛美歌」では、特定の色を対比的に使うことは現代において忌避されます。

このように、賛美歌は時代の価値観をコンテクストにしながら、その時代が必要なテクストをつむぐことになります。結果、多様な価値観が交差する現代では、かなりいろいろな変化が起こっています。２０２５年11月８日に行われた日本賛美歌学会第25回大会では、テーマ「今、わたしたちは何を歌うのか？」の下で、現代の賛美歌で使用する言葉や、賛美歌全体の意図する内容について、いくつかの課題が提示されました。紙面の都合もあるので、ここでは二つだけシェアしたいと思います。

一つ目は、「神」を表す言葉として「主（しゅ）」「父なる神」の使用を控える、というものです。北米では「主 Lord」という言葉が「主（あるじ）と奴隷の関係」を想起させ、奴隷の歴史に触れる繊細な問題であると同時に、使い方によってはある特定のグループのことを指すことにもなり得ることから、「使用しない」と明言している作家もいます。一方の「父なる神」は、父親からの虐待を受けてきた人への配慮や、「父権制」への抵抗から使わない、という判断です。

二つ目は、その賛美歌が「壁を作る賛美歌か、それとも橋を架ける賛美歌なのか？」というものです。かみ砕いていうと、今歌っている賛美歌は、壁を作って自分たちの集団を守る（あるいは他者と区別するための排他的）役割を果たすものなのか、それとも、橋を作って分断された関係にあるところに橋を架けていく賛美歌なのか、という視点です。

いずれも、賛美歌がまずもって「会衆歌」だからこその課題です。古くから賛美歌は、キリスト教共同体の形成に深く関わってきました。それは見方を変えると、他の集団からその共同体を隔離する役割を果たしてきたとも言い換えられるでしょう。一つ目の課題は、共に歌うとき、顕在・潜在にかかわらず共に歌う人の背景や背負うものを思いやる時に見えてくるものであり、二つ目の課題は、各方面で厳しい分断が見られる現代だからこそ、区別ではなく共にあることを歌い上げる賛美歌を渇望するものだと言えるでしょう。

「過剰な配慮なのではないか？」や「日本と他国は違う文化・歴史なのだから」ということで議論を終わらせるのは簡単です。しかしだからこそ、「イマ・ココに生きる私たちの賛美歌」が必要であり、それをめぐる議論を面倒がらないことが大切だと思います。なぜなら同時代に創作された賛美歌は、作者（私たち）という存在をもって神の創られた「イマ・ココ」の世界を表現するものだからです。

最後に、先述の日本賛美歌学会第25回大会で発表された、「賛美歌を創ろう！」の歌集の中から一つ創作賛美歌を紹介します。

《となりで共に》

佐藤 菫※

思えばいつも　気が向くままに
自由に生きてきたけれど
私の横で君はきっと　違和感持っていたのか
私は横に居ていいのか　変わるべきなのか

小さき声が　形となって
言葉やルールがつくられる
従うだけが正しさなのか　何を守りたいか

うわべで接し逃げるのか　君と向き合うか

積み上げてきた　互いの価値観
重なり合うもずれていて
全てを理解はできないけれど　それでも分かりたい
となりで君と語り合い　共に笑いたい

「神さま」も特別聖書的な言葉が用いられることもなく、率直な言葉でつむがれた歌詞です。そこには、となりにいる友と共にありたいという思いがあふれています。

この時のテーマは「多様性」で、皆で決めたものの「難しいなぁ」と、苦戦していました。作者は結局「多様性」から「互いを受け入れる」ということにテーマを再解釈して、この歌詞が出来あがりました。「私はこのままで良いのか？　となりの友達に、私はどう見えているんだろう？　私は友達を心から受け入れられているのか？」といった、複雑な思いが歌い込まれています。そこには、作者が見ている互いに受け入れ合う世界への希望があります。

作者はこの春（２０２６年３月）に卒業しました。青山学院大学で過ごした４年間に神の創られた世界を感じ、「となりにあること」の意味を考え、歌を通して神さまが共にある徴を見せてくれたように思っています。

※大学経営学部マーケティング学科４年（創作時）